豊見城市文化財ガイドブック

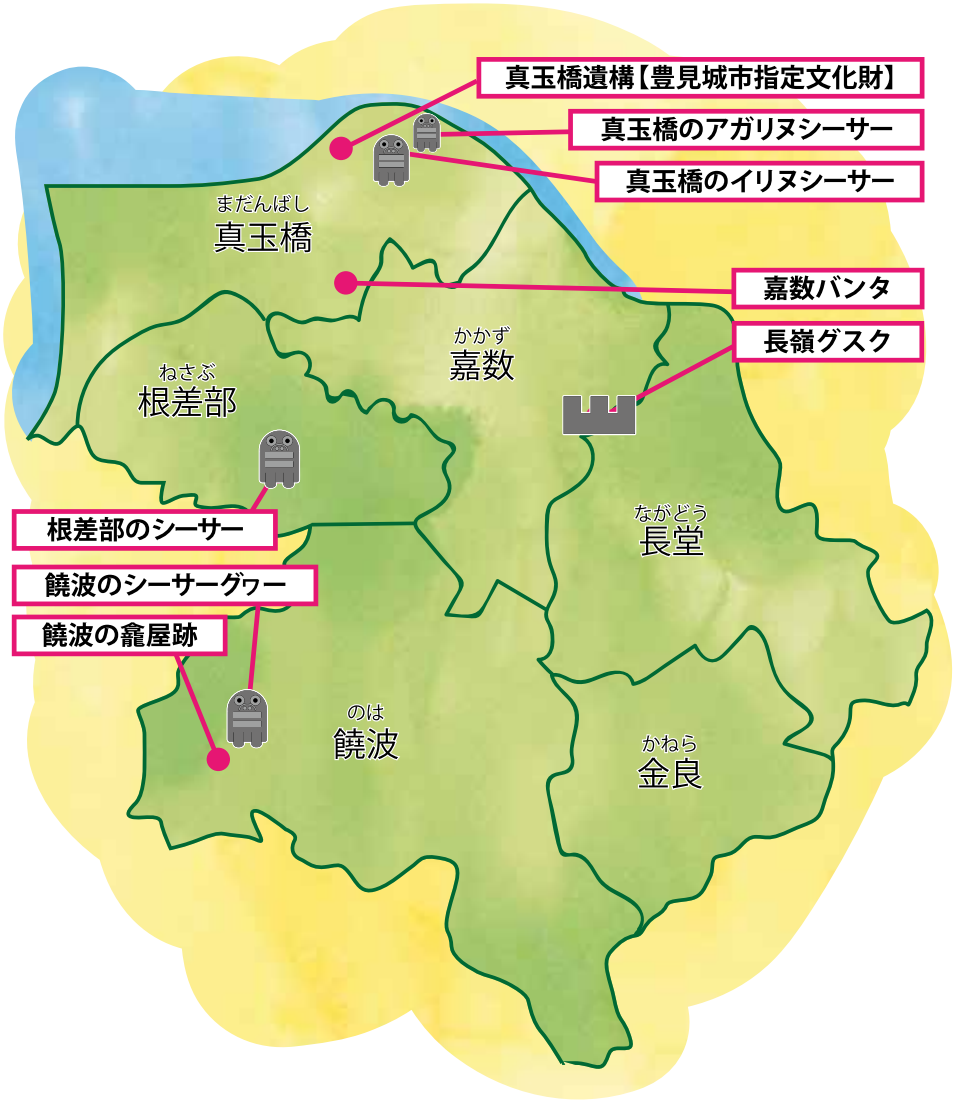


豊見城市教育委員会


TOMIGUSUKU City
豊見城市
文化財マップ
Cultural property MAP
ハーリー発祥地「漫
チーヤ（津屋）
山部隊野戦病院患者
豊見城グスク
豊見瀬御嶽
濤魄の塔
豊見城の梵字碑
豊見城尋常小学校跡地
名嘉地のシーサー
宜保のビ
高安
平良
田頭のシーサー
瀬長島（瀬長グスク）
伊良波収容所跡
与根の塩田跡地
豊見城市歴史民俗資料展示室
座安のイシマシモーと三本松
渡橋名のクンジャーガーと風
珠数森（ジジムイ）
保栄茂のシーサー
ジョン万次郎と翁長高安家


湖」
者合祀碑
真玉橋遺構【豊見城市指定文化財】
真玉橋のアガリヌシーサー
真玉橋のイリヌシーサー
第 24 師団野戦病院壕跡
嘉数バンタ
長嶺グスク
石火矢橋
根差部のシーサー
饒波川・タングチ流域
高安のシーシヌメー・シーシヌウカミ
高安のビジュン
ビジュン
饒波のシーサーグヮー
の龕屋
饒波の龕屋跡
グスク
平良のムラシーサー
デークガー
渡嘉敷のシーサー
高嶺のシーサー
トゥドゥルチガー（轟泉）
監視所跡
車跡地
保栄茂グスク
紀元二千六百年祭記念掲揚台
御大典記念碑
保栄茂の馬場
保栄茂の龕屋
豊見城市
文化財マップ

東　部　地　域


真玉橋遺構【豊見城市指定文化財】
真玉橋のアガリヌシーサー
真玉橋のイリヌシーサー
まだんばし
真玉橋
嘉数バンタ
長嶺グスク
かかず
嘉数
ねさぶ
根差部
根差部のシーサー
ながどう
長堂
饒波のシーサーグヮー
饒波の龕屋跡
のは
饒波
かねら
金良





真玉橋遺構（まだんばしいこう）【豊見城市指定文化財】

1522 年に首里～屋良座森（ヤラザムイ）グスクまでの軍用道路「真珠道（まだまみち）」のために架けられた橋である。当初は木造の五連橋で中央を真玉橋といい、南側が世持橋、北側が世寄橋、両端は無名の橋であった。石造に改修後、大きく美しい曲線の六つのアーチを連ね、水流から橋を守るために潮切りを設けるなど構造的にも沖縄独特の石造文化を代表する橋であった。1996年の発掘調査でその一部が出土し、現在地に一部を移築した。

真玉橋（まだんばし）のイリヌシーサー



集落西側に位置し、漫湖に浮かんでいたガーナー森に向けて立てられた伝承が残る。「昔、ガーナー森は大きな魔物で、村人を襲ってきた。村人が困っていたところ、天から３つの大石が降り、魔物は動けなくなり湖面に浮かぶ小島となった。村人たちは神の加護に感謝し、再び動き出さないよう、シーサーを置いた。」現在でも、シーシウガミと称して旧暦８月15日には果物や饅頭を供え、地域の災いを防ぎ住民の健康祈願を行っている。

真玉橋（まだんばし）のアガリヌシーサー



集落のほぼ中心部、生活道の脇に置かれている。国場川を隔てた対岸の高台・カラヤームイ（瓦屋原：那覇市国場）に向け置かれ風難を防ぐための守りであると伝えられている。また「瓦屋節」の歌詞にある陶工にめとられた女性は豊見城間切翁長出身であるとの伝承もあり、当時の人々にとって災いが来る場所と捉えられていたようだ。現在でも、シーシウガミと称して旧暦８月15日には果物や饅頭を供え、地域の災いを防ぎ住民の健康祈願を行っている。





嘉数（かかず）バンタ

かつて豊見城グスクや瀬長島とともに「豊見城三景」に並び称された景勝地である。眼下には漫湖や豊見城グスク、奥武山にガーナー森、さらに那覇港や東シナ海まで一望できる絶景の場所であった。琉球王府時代、バンタに隣接して王家の分家筋にあたる豊見城御殿（ウドゥン）の別荘が置かれ、別荘をおとずれた要人たちがくつろぐ場所でもあったと伝えられている。松の木やソテツが周辺に群生し、広大な草地は隣接する馬場とあわせて、字民の憩いの場所であった。



長嶺グスク（ながみねグスク）

嘉数と長堂（ながどう）の境に位置し、標高 98m の丘陵上に形成されたグスクである。長嶺按司の居城で南山の第一線として備え、グスクの頂上部付近を物見、その東側がグスクの台所と伝えられた場所もある。グスク内には『琉球国由来記』（1713 年）に記載された「長嶺城之殿」や按司墓等がある。尚金福王（1450 ～ 53 年）の時代に長嶺按司陵正が、中国に渡り砂糖製造法を習い受け、製糖を教え広めたという砂糖製造の始まりに関する伝承が残されている。

根差部（ねさぶ）のシーサー



集落中心部にあるこのシーサーは、真玉橋のイリヌシーサーと嘉数のシーサーと同様に漫湖に浮かんでいたガーナー森に向けて据えられた伝承が残る。現在、シーサーはガーナー森への魔除けとしてだけではなく、女性たちによる拝みと祝宴の行事「三月遊び（サングヮチアシビ）」の際に、集落の守り神として拝まれている。

根差部の三月遊びは、大きな家々に女性達が集まり、日々の労働から離れ、余暇を楽しむ行事であり現在でも盛大に行われている。

饒波（のは）のシーサーグヮー



集落中心部に位置し、琉球石灰岩と焼き物の 2 体が並んで、饒波川対岸の平良にあるアチャーヤーガマという洞窟に対する返しとして据えられたと言われる。本来は 2 体とも琉球石灰岩のシーサーであったが戦争で 1 体が破壊されたため、1995 年の公民館落成とともに新たに造られた。旧暦 8 月 9 日の「龕の祝い（コーヌユーエー）」に龕屋と併せて祈願される。



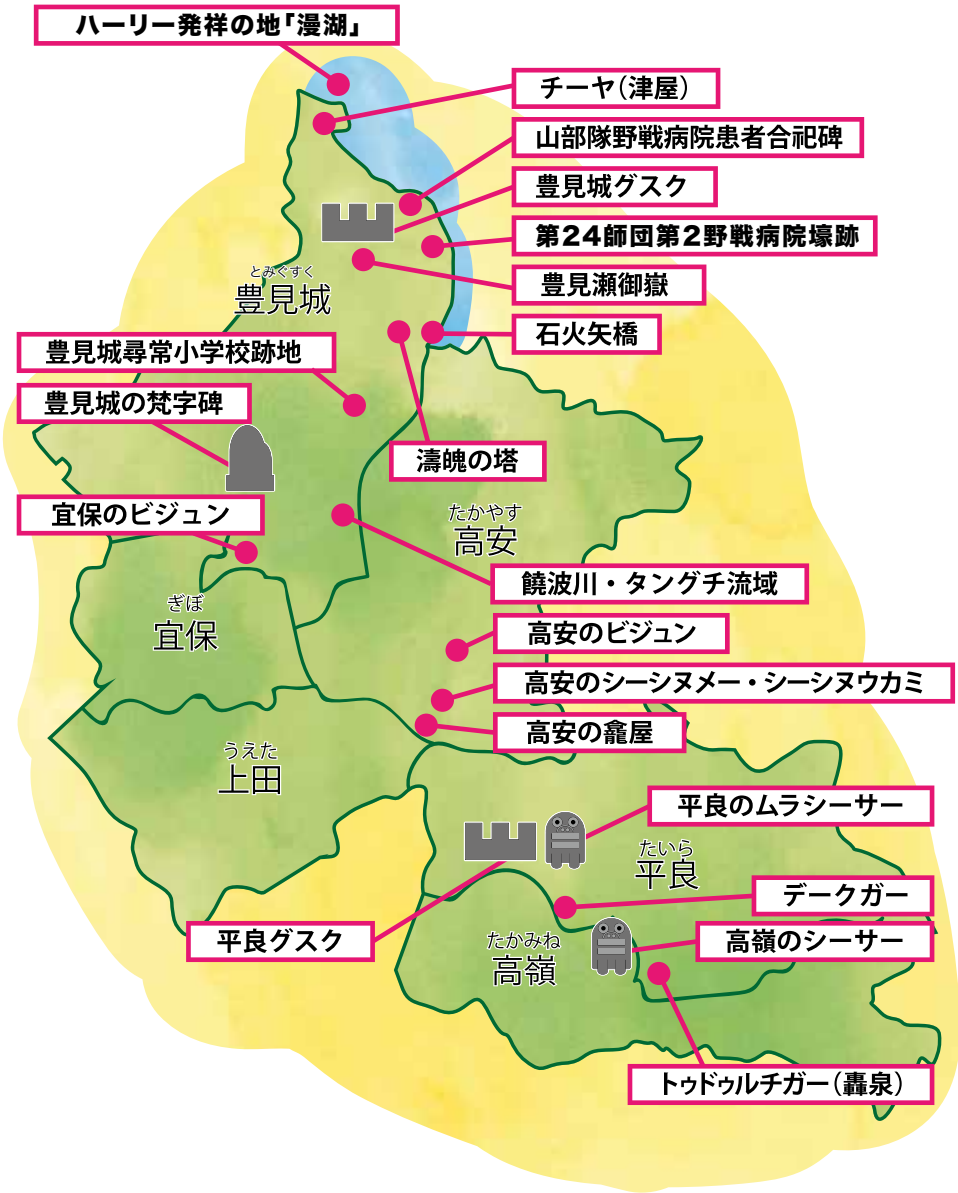
饒波の龕屋跡

饒波の龕を保管する建物「龕屋」の跡地として拝所となっている。かつては野辺送りの際、龕に死者を納め、チューフーと呼ばれる担ぎ手達によって家から墓まで運ばれていた。また地元だけでなく、龕を所有していない平良、高嶺、金良など周辺集落にも貸し出された。戦後は 1967 年頃まで使用された。旧暦 8 月 9 日には「龕の祝い」と称して祈願が行われ、13 年毎に盛大に行われる。現在、龕本体は豊見城市教育委員会に寄贈されている。



饒波の龕（豊見城市指定文化財）

中　央　地　域


ハーリー発祥の地「漫湖」
チーヤ（津屋）
山部隊野戦病院患者合祀碑
豊見城グスク
第24師団第2野戦病院壕跡
豊見瀬御嶽
石火矢橋
とみぐすく
豊見城
豊見城尋常小学校跡地
豊見城の梵字碑
濤魄の塔
宜保のビジュン
たかやす
高安
饒波川・タングチ流域
ぎぼ
宜保
高安のビジュン
高安のシーシヌメー・シーシヌウカミ
高安の龕屋
うえた
上田
平良のムラシーサー
たいら
平良
デークガー
平良グスク
たかみね
高嶺
高嶺のシーサー
トゥドゥルチガー（轟泉）



豊見城（とみぐすく）グスク

豊見城グスクは豊見城集落の北東側、標高 54 mの湧湖を眺望できる丘陵上に立地している。14 世紀末～ 15 世紀初頭に南山の汪応祖が築城し、尚巴志によって落城したと伝承が残る。1719 年には冊封使の徐葆光（じょほこう）が、1853 年にはペリー艦隊一行が訪れ、城内より見た風景をそれぞれ記録している。グスクは戦前の写真資料等から城壁やアーチ門等が確認できるが、沖縄戦等により破壊され、現在は北側に城壁と思われる石積みの一部が確認されている。

豊見瀬御嶽（とみせうたき）



豊見城グスク内にある御嶽で『琉球国由来記』（1713 年）に「城内豊見瀬御嶽　コハナリノ御イベ」と記されている。戦前はアーチ状の石門に木戸があり、豊見城ノロとビンシー持ちのみが入場を許された。豊見城集落では五月ウマチー、六月ウマチーに祭祀を行う聖地である。この他にも旧暦５月４日に行われる那覇・泊・久米の爬ハーリー竜船競漕前に拝まれ、大干ばつの際は那覇久米村の竜王殿（上天妃宮）から竜王像を爬竜船に乗せて運び雨乞い行事を執り行った御嶽である。

ハーリー発祥地「漫湖（まんこ）」



琉球王国時代の歴史書『球陽』(1745 年）によると、豊見城城主の汪応祖が中国に留学した際に龍舟を川に浮かべて競漕するのをみて感動し、帰国後、中国の製法に習って龍舟を造り、５月に城下の漫湖に浮かべて遊覧した。それを見て那覇周辺の人々は龍舟を造り、旧暦５月４日に豊見城城下に来て競漕し、お目にかけるようになったのがハーリーの発祥といわれている。『琉球国由来記』（1713 年）には、毎年５月４日に豊見瀬御嶽で祭祀をしたとある。

チーヤ（津屋）



豊見城グスクの北方、漫湖南西岸に浮かぶ琉球石灰岩でできた小島である。豊見城集落では毎年旧暦４月に、害虫駆除と作物の豊作を祈願するアブシバレーが行われる。『琉球国由来記』(1713 年）には旧暦５月４日に那覇、久米村、泊村の爬龍舟が、チーヤに直接漕ぎ着け、そこから豊見城グスク内にある豊見瀬御嶽に向け遥拝したとある。かつて漫湖が水上交通の要衝として賑わっていた時代の舟着場でもあったとも伝えられる。

石火矢橋



石火矢橋は豊見城グスクの南東側、饒波川下流に架けられた橋である。橋の創建年代は定かでないが、戦前まで美しい曲線のアーチとそれを支える独特な形の橋脚が連なる５連の石造アーチ橋であった。三山時代、尚巴志が南山の支配下にあった豊見城グスクを攻めようと城内に女間者を送り、謀計によって架けさせた伝承が残る。王府時代、首里城から那覇港南岸に軍勢を集結する王府の真珠道の道筋にもあたり、軍事面・交通の要衝としても重要な橋であった。





陸軍 24 師団第 2 野戦病院壕（壕内立入禁止）

陸軍第 24 師団（通称「山部隊」）が豊見城城跡東端の崖面に構築した野戦病院壕です。沖縄戦序盤には、西原・浦添方面から負傷した兵士らが次々送られ、一時、壕内には 600 人近い負傷兵であふれかえったといわれています。この壕には私立積徳高等女学校の生徒らが看護隊として配属され、負傷兵の治療や看護にあたっていました。1945 年 5 月 27 日には戦況の悪化とともに野戦病院壕も糸洲方面に撤退することとなり、その際自力で歩けない患者には水や乾パンなどが与えられ置き去りの処置がとられたそうです。同年 6 月 26 日、糸洲の壕で看護隊に解散命令が出たとき、部隊を率いる小池勇介隊長は女学生らに「けして死んではならない。」と生き延びるよう諭し、軍とともに行動することを許さなかったため多くの女子学徒が生き延びました。学徒隊の多くが悲惨な最期を遂げる沖縄戦において積徳学徒隊からはほとんど戦死者はなく、非常に稀な事例とされています。壕は、崩落防止の鉄骨支柱を施し一般公開された時期もありましたが、崩落の進行が著しく現在は公開されていません。1982 年、部隊生存者と学徒隊により「患者合祀碑」が壕の近くに建立されています。

山部隊野戦病院患者合祀碑



豊見城城跡内にあった第２野戦病院壕内に負傷兵として収容され、そこで亡くなった戦没者を祀っています。この野戦病院壕では軍医、看護婦、学徒隊（積徳高女）らが配属され、前線から送られてくる負傷兵らの治療看護にあたっていました。多いときには約 600 人の負傷兵が患者として収容され、治療の甲斐なく壕内で息を引き取った人々の御霊を慰めるため 1982 年（昭和 57）野戦病院関係者および積徳女学校生存者らによって建立されました。

濤魄の塔



1953 年（昭和 28)、字豊見城の人々が、集落周辺および豊見城城跡一帯に散らばっていた戦没者の遺骨を収集し、「英魂之塔」を建立。続く 1955 年には豊見城に駐屯していた歩兵 22 連隊の生存者らの手で、英魂之塔の隣に「北琉之塔」が建立されました。その後 1966 年に改修合祀され、二つの慰霊碑がまとめられ「濤魄の塔」として建立されました。現在も、慰霊の日などには毎年、字豊見城自治会の皆さんにより慰霊祭が行われています。

豊見城の梵字碑

ニービヌフニとよばれる細粒砂岩製の碑で、梵字（古代インドのサンスクリット語を書き表す文字）で彫られている。碑文は上部が失われているが、残存する部分から「アビラウンケン」と推測され、宇宙を形成する「地、水、火、風、空（空間）」を意味し、密教で宇宙の中心の仏とされる大日如来を表している。この碑が建立された時期や由来などは不明だが、魔よけの意味を持つものと考えられる。



豊見城尋常小学校跡地

本市における学校教育の歴史は、明治 13 年（1880）、「豊見城小学校」の名称で、豊見城集落にあった間切番所（現在の役所のこと）内の一室を教室として開設されたのがその始まりとされる。明治 20 年（1887）には「豊見城尋常小学校」に校名が改められ、明治 21 ～ 22 年頃に校舎を番所内から「メーヌヒラ」へ移転した。明治 31 年に開校した豊禄兼高等小学校（豊見城、小禄、兼城の 3 間切が校区）も兼城間切より移転し併設された。



那覇市歴史博物館所蔵（資料コード 02004662）

高安（たかやす）の龕屋（がんや）

龕（ガン）とは、野辺送りの際に、死者を納めた棺をのせて運ぶ屋形型の輿こしのことである。その龕を保管する建物を「龕屋（ガンヤー）」と呼ぶ。伝承ではテーラシカマグチが中国から持ち帰った龕を豊見城集落の〈沢岨〉に譲り、後に高安集落が引き継いだと云われている。その龕を12年に一度の辰年、旧暦8月9日に修復等も兼ね、龕の魂を鎮め、武術や芸能を奉納し、字民の無病息災を祈願する祭祀として龕ゴウ祭が行われる。



高安の龕屋

高安（たかやす）のシーシヌメー・シーシヌウカミ

龕屋の北側琉球石灰岩の大岩上部にある拝所をシーシヌメー（獅子の前）と呼ぶ。陶製の獅子像一体が龕屋に向けられ据えられている。これは獅子に龕を睨ませ龕の霊を鎮めるという意味があり、死者を納めた龕のけがれに対する魔よけとされている。毎年の旧暦8月9日に行われるガンゴウや12年に一度の龕ゴウ祭、旧暦3月3日のサングヮチアシビには女性のみの御願が行われる。



高安（たかやす）のビジュン



豊見城市内ではビジュル（霊石）信仰を一般的にビジュンと呼ぶ。高安のビジュンは祠の中に丸みのあるニービヌフニ（細粒砂岩）１個を霊石として祀っている。高安のビジュンでは旧暦９月13日に、ビジュンヘーシという伝統行事が現在でも行われている。無病息災や家内安全を祈願するほか、新生児が生まれた家や新築世帯では泡盛の一升瓶を供えて報告することが習わしとなっている。また、字役員が瀬長島でサンゴ石を拾いビジュンに供えている。

宜保（ぎぼ）のビジュン



アガリヌモーグゥーという小高い丘の中央に祠があり、丸みのある石１個を霊石として祀っている。宜保のフンシ（守り神）であるいわれ、家族の健康祈願や旅に出る際、旧暦１月２日の初御願や五月ウマチー、旧暦６月25日の夏ヌ御願（カシチーウイミ）等に拝まれる。また、夏ヌ御願の日に綱引きが行われるが、戦前はビジュンの敷地内で綱打ちが行われた。沖縄戦以前は「大詔奉戴日」に戦勝祈願が行われ、出征軍人の壮行会も行われた。

平良（たいら）グスク



集落の背後に連なる本市最標高109 mの丘陵上に形成されたグスクである。形成された時代は14世紀～15世紀ごろと推定され、三山時代における南山の前衛的な性格を持つグスクであったと考えられる。グスク内には平良の御嶽があり、初拝みや五月ウマチーなどに村やノロ、門中などが拝んでいるほか、多くの古墓群が並んでいる。組踊「未生の縁」の舞台となっており、2003年（平成15）には記念碑も建立（平良公民館敷地内に設置）されている。

平良（たいら）のムラシーサー



集落の北東端に位置しており、加工されていない琉球石灰岩自然石の獅子像である。小高い大岩の最上部で、饒波川対岸の高安方面に向けて据えられている。旧暦8月15日にはシーサーヌユーエー（獅子のお祝い）といわれる祭祀があり、ノロや区長、頭などがフチャギと重箱を供え拝む。戦前は拝みの後に、広場に集まり月見を楽しんだ。ノロ墓と隣接した場所にある。

トゥドゥルチガー（轟泉）



高嶺公民館の南東約 150m、県道 7 号線沿いに位置する。『琉球国旧記』（1731 年）に「平良井（平良轟）」、18 世紀後半頃の「琉球國惣絵図」に「樋川」と記録され、およそ 300 年前から貴重な水源として大切にされてきた。水源利用は周辺集落にとどまらず、明治末期までは灌漑用水路によって志茂田平野の稲作田へ、戦後は簡易水道の水源として旧豊見城村役所（上田庁舎）周辺まで、使用した時期があった。平良・高嶺が「初拝み」、「五月ウマチー」等に拝んでいる。

高嶺（たかみね）のシーサー



公民館隣のイームヤーという小高い丘の最上部で、糸満市武富（武富グスクか）に向けて据えられている。旧暦 8 月 15 日にはシーサーヌウユエー（獅子のお祝い）といわれる祭祀があり、区長や役員などがフチャギを供え拝む。〈徳門〉のアシビヌ神も拝んだ後に、イームヤーに集まり月見を楽しんだ。

デークガー


紀元 2600 年にあわせて改修されたデークガー

この井戸は集落内を走る旧県道７号線沿い、平良公民館に向かう坂道の入口かどにあります。「紀元２千６百年」を記念して改修された井戸の前面壁がいまも残っており、柱状の中央部分に「紀元」、「記念」と刻まれた文字が確認できます。なお、この井戸のコンクリートの骨組みは物資不足と倹約の世相を反映し、その骨組には鉄筋は使われず竹が使用されたと言われています。

特攻艇（とっこうてい）が配備（はいび）された饒波川（のはがわ）・タングチ流域（りゅういき）


タングチ跡にあった拝所

饒波川に架かる石火矢橋から上流向け、字高安のタングチと呼ばれた一帯までの流域には日本軍の「特攻艇」が配備されていました。特攻艇とは小さなボートに爆薬をのせて、敵の船に体当たり攻撃を行う兵器のことです。特攻艇は川岸に垂れ下がる樹木の陰にかくしてつながれて配備されていたそうです。


◀川岸に配備されていた特攻艇（沖縄県公文書館提供）


◀現在の饒波川



アカサチ森壕跡（周囲から見学）

瀬長島の入口付近、豊見城警察署に隣接する小高い丘は地元では通称「アカサチ森」と呼ばれています。ここには沖縄戦のとき日本軍によって壕が築かれ、内部には井戸や海側に向いた監測窓（銃眼）などが備わっていました。豊見城海岸からの米軍の進攻に備えた陣地かと推定されます。2000 年頃、開発によりアカサチ森の一部が削り取られたため、そのときに壕の一部は消滅、入口も閉ざされたため、現在は内部をみることはできません。



我那覇周辺の壕跡（周囲から見学）

字我那覇集落と小禄宇栄原一帯を区切るように走る我那覇丘陵地帯、さらに我那覇集落内にある通称メーヌモー付近には日本軍が築いた壕および一般住民が避難のために築いた壕が点在していました。現在、壕のほとんどが内部の崩落や開発などの理由から入口がふさがり、その位置確認が難しくなっています。



サバキナ壕跡（壕入口は消滅。周辺から見学）

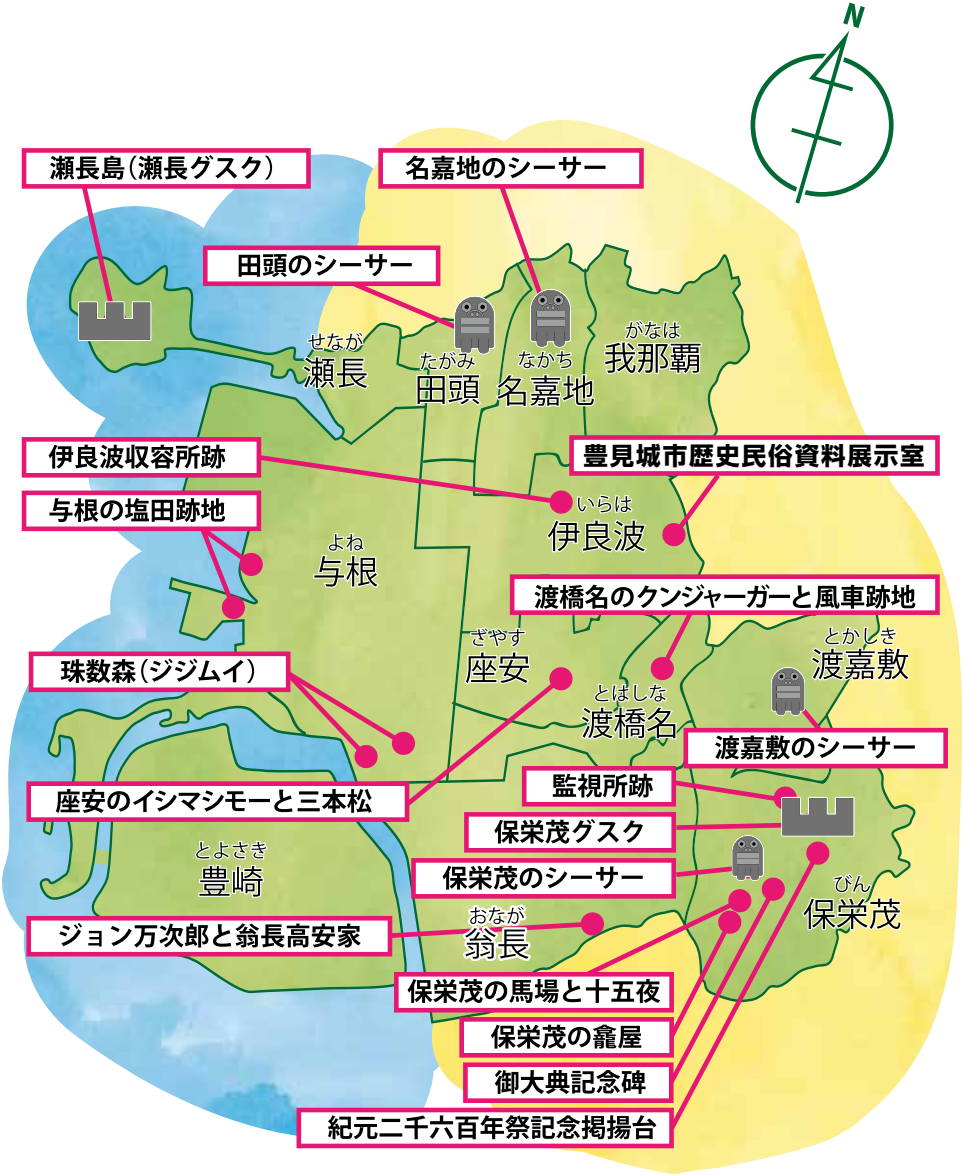
名嘉地集落の南側、県道 68 号線沿いに位置し、壕の名称は、所在する一帯が「サバキナ」と呼ばれていたことからそう呼ばれております。県道から少し奥に入って畑地帯へと抜ける道路がちょうど切り通し（ワイトゥイ）になっており、その切り通しの両側に並ぶような形で比較的規模の小さな壕が密集していました。これらは沖縄戦を前にして、おもに字伊良波の人々の手によって築かれ家族や親族単位で避難用の壕として利用されたようです。2014 年に道路拡張工事のため壕の前面部分が削り取られため壕口は塞がれ , 現在、内部をみることはできません。



瀬長・田頭丘陵周辺構築壕群（周囲から見学）

瀬長、田頭集落後方の丘陵地帯には、沖縄戦当時、日本軍や住民らによって築かれた壕が残っています。しかし、時間の経過とともに壕内部の崩落や、開発や危険防止の理由などから壕入口をふさぐなど、その位置確認も次第に難しくなっています。田頭・名嘉地一帯は沖縄戦のとき当初、対戦車用の砲兵部隊が配備されており、このことも豊見城沿岸が米軍の上陸地点として想定されていたことをあらわしています。

西部地域・西海岸地域


N
瀬長島（瀬長グスク）
名嘉地のシーサー
田頭のシーサー
せなが
瀬長
たがみ
田頭
なかち
名嘉地
がなは
我那覇
伊良波収容所跡
豊見城市歴史民俗資料展示室
与根の塩田跡地
いらは
伊良波
よね
与根
渡橋名のクンジャーガーと風車跡地
ざやす
座安
とかしき
渡嘉敷
珠数森（ジジムイ）
とばしな
渡橋名
渡嘉敷のシーサー
監視所跡
座安のイシマシモーと三本松
保栄茂グスク
とよさき
豊崎
保栄茂のシーサー
びん
保栄茂
おなが
翁長
ジョン万次郎と翁長高安家
保栄茂の馬場と十五夜
保栄茂の龕屋
御大典記念碑
紀元二千六百年祭記念掲揚台



瀬長島（瀬長グスク）

沖合約600ｍに浮かぶ周囲約1.5kmの離島で、戦前まで約30戸の集落があり、半農半漁の暮らしを営む有人島であった。太古の時代、琉球開闢の神アマミキヨの子、南海大神加那志が最初にこの島に住み、豊見城の世立てが始まったと豊見城発祥伝説が残る。それに関連してか現在でも旧暦９月には瀬長ムヌメーという健康祈願・新生児紹介が行われる。島の最上部に瀬長按司が居住した瀬長グスクがあったと伝えられている。豊見城を代表する風光明媚な景勝地といわれ、男女の恋愛を題材とした組踊「手水の縁」の舞台の一つであると言われ記念碑が建っている。

ジジムイ・ジジモー
珠数森



17 世紀中期の「琉球国絵図」には「つゝ嶋」と記されている丘陵である。『琉球国由来記』(1713 年)には大干ばつに王府役人達が那覇の上天妃宮にあった龍王を豊見城城内に安置して龍王に酒や花米、水を供え降雨を祈願した。その翌日から間切内の各御嶽で雨乞いを行い、最終日には珠数森で間切中の神女や役人達が揃って雨乞いをした。この時、鍋で海水を汲み、これを「珠数大アスメ（霊石)」にかけた後、この鍋を保栄茂ノロが頭にのせ 7 回廻る祭祀が行われた。

与根の塩田跡地（よね　えんでんあとち）



与根には干潟を利用した入浜式塩田があり、かつては県内でも主要な製塩地として「与根マース」の名で知られた。明治 30 年代中頃、おもに那覇・泊からの移住者らにより始められた。塩田に砂をまき、これに海水を散布して天日に干し、砂に塩分を付着させる。砂を集めて「クミ（ろ過槽)」に入れ、海水をかけて砂に付着した塩分が溶け出し濃縮された塩水が得られ、これを煮詰めて塩にした。昭和 4 年（1929）には塩田の周りに防潮堤が建設されるなど周辺整備も進められ、終戦までに約 3 万 8 千坪の塩田が開発されていた。

田頭（たがみ）のシーサー



田頭の２体のシーサーの１つは集落の西端に位置し、瀬長島に向けられていると言われ、西から来る災厄から集落を護っている。伝承によれば 200 ～ 300 年前、疫病の流行により集落移動してきた際に造られたと伝えられ、古くから集落の護り神として大切にされてきた。沖縄戦の際、丘陵地に住民が避難している中、米軍の戦車が侵攻してきたが、シーサー像に車体が乗り上げたため方向転換させ、人々は難を逃れたとの逸話が残っている。

名嘉地（なかち）のシーサー



集落の西端に位置しており、県道 231 号線（旧糸満街道）から集落へ入る入口に鎮座し、集落の外側に向いている。外からやって来る様々な邪気を集落に入れないよう設置されたと推測される。名嘉地の守り神とされ、旧暦８月 15 日にムラの安全祈願をするシーサー拝みや旧暦４月のアブシバレーで拝まれる。明治期には集落北端にあるシーシヌメーと呼ばれる広場にあったが、集落西側に現県道 231 号線が通る事になったため、字の常会においてシーサーの移設を決定し、現在に至ったと伝えられている。

渡嘉敷（とかしき）のシーサー



現在は公民館隣に位置し、集落の南側にそびえ立つ保栄茂グスクの一部、西御嶽付近の大岩の穴が、大きく口を開けて「渡嘉敷クヮークヮー（渡嘉敷集落を食おう）」としているように見えるので、その返しの魔除けとして据えられたと伝えられている。また村に火事が多かったのでその火返しの魔除けとして建てられたという伝承もある。正月や旧暦５月に門中単位でシーサーへ拝みが行われている。

座安（ざやす）のイシマシモーと三本松





集落の西に位置しているイシマシモーと呼ばれるニライカナイの神を祀った拝所である。戦前期は製糖期終了後の腰休めの行事が行われ、五月ウマチーと六月ウマチーで巡拝する。また、6月の綱引きには西の人々が綱打ちする場所であった。以前は枝振りが見事な琉球松「座安の三本松」があり、平坦な志茂田平野の畑地帯の中で、数少ない小高い場所であったイシマシモーの上に立ち、推定 10m ほどの高さがあり、座安の名勝として周辺に知れ渡っていた。

渡橋名（とはしな）のクンジャーガーと風車跡地



集落が所在する真和志原の南端に位置する井戸である。別名ウブガーとも呼ばれ、正月の若水や葬儀の湯灌の水としても利用された。1960 年代頃まで、井戸後方には大きな琉球松が 2 本生えており、「渡橋名の二本松」と呼ばれ親しまれた。1960 年にはクンジャーガーのすぐ北側に、「SOUTHERN CROSS」と書かれた風向舵の特徴的な風車式灌漑施設が弁務官資金によって建設された。2002 年に豊見城村教育委員会へ風車の一部が寄贈され、現在は豊見城市歴史民俗資料展示室において展示公開されている。

保栄茂（びーん）のシーサー



集落の南西端に位置している石造の獅子像は、屋号〈門才順〉の方が、唐旅（中国）から持ち帰り、集落の魔除けや火災防除のために安置したと言い伝えられている。保栄茂ではシーサーに対して、元々は魔除けであったが農作物の保護神と考えられるようになったため、火災除けや疫病退治の効力もあると考えられるようになったという。

保栄茂（びーん）グスク



集落の北東側に位置する標高106mの丘陵上に形成されたグスクである。三山時代、中山に対峙する第一線の拠点である瀬長、豊見城、長嶺の各グスクに対し南山グスクからの中継地としての役割をもつ出城と考えられている。グスク内には『琉球国由来記』（1713年）に記載された保栄茂城殿（トゥヌ）があり、五月ウマチーと六月ウマチーにはカミンチュや役員、各門中の人々が集まり祭祀が執り行われている。組踊「未生の縁」の舞台となっており、2003年（平成15）には記念碑も建立されている。

監視所跡（かんしじょあと）



岩穴をコンクリートで覆い観測窓と推測される構造が確認できます

保栄茂グスクの頂上部の西側崖面に構築されたこの施設は、海上付近にいる米軍の艦船の状況や、海側に発射された砲弾の着弾地点などを観測する監視所（観測所）として日本軍によって築かれたものだと言われており、岩山の空洞を利用して、監視用の窓の部分だけコンクリートで固めた造りとなっています。普段は人が訪れることができない山中にあるため立入ることは厳しいが、戦跡めぐりなどに案内されることも多く、そうした機会にみることができます。岩穴をコンクリートで覆い観測窓と推測される構造が確認できます。

保栄茂の馬場



馬場は琉球競馬（走る美しさを競う）や祭り、集まりで使われた広場である。地域の一大行事である十五夜（豊年祭）が行われる他、東南側には龕屋、馬場のスタンド中央には御大典記念碑（1928 年造）も現存している。旧暦 8 月 15 日～16 日に行われる十五夜には、旗頭、綱引きに伝統舞踊等が披露される。特に 6 年毎の卯年と酉年は大豊年祭と呼ばれ、市内で唯一のミルク神と 100 名以上の男性が参加する集団の棒演技である「マチ棒（巻ち棒）」が行われる。

保栄茂の龕屋



龕とは、野辺送りの際に、死者を納めた棺をのせて運ぶ屋形型の輿のことである。その龕を保管する建物を保栄茂ではコージャーヤー（コーヤー）と呼ぶ。大正時代に集落内のウドゥンモーにあったものを現在地に移した。保栄茂の龕は、糸満市北波平が所有していたものを、保栄茂が所有していたシーサーと交換したものであると伝えられている。旧暦 8 月 9 日には「コーヌユーエー（龕のお祝い）」が行われ、6 年に一度の大豊年祭には供物や奉納舞踊等が捧げられる。

御大典記念碑（ごだいてんきねんひ）

昭和天皇即位（御大典）を記念して集落内のンマイー（馬場）を整備したとき建立されたもの。保栄茂馬場広場の観覧スタンドにあり、「御大典記・・」「昭和三年」と刻まれた文字を読み取ることができます。昭和３年は御大典を記念して全国各地で記念行事や公共施設（運動場や道路など）の建設、改修事業などがさかんに取り組まれました。馬場広場にいまも残る御大典記念碑（写真説明文）



馬場に残る御大典記念碑

紀元二千六百年祭記念掲揚台（きげんにせんろっぴゃくねんさいきねんけいようだい）

昭和 15 年（1940）に、保栄茂青年団が「紀元２千６百年（※注）」を記念して製作した国旗掲揚台。旧公民館敷地内にあり、セメントで仕上げられた掲揚台の表面には、「記念二千六百年祭」「昭和十五年一月六日青年団」と読み取ることができます。

※注：紀元二千六百年祭　1940 年（昭和 15）は、皇紀 2600 年目の節目にあたる年だとして全国各地で様々な記念事業が取り組まれた。県内ならびに豊見城においても集落の共同井戸や拝所、門中墓などの改修、国旗掲揚台の設置等、記念事業がさかんに取り組まれました。



青年団が紀元 2600 年祭を記念してつくった掲揚台



ジョン万次郎（まんじろう）と翁長高安家（おなが　たかやすけ）

ジョン万次郎（中浜万次郎）は、米国の捕鯨船に救助され、渡米し様々な分野を学んだ後に、鎖国中の日本に戻り、日米の橋渡し役として多方面で活躍した人物である。日本へ帰国前に、現在の糸満市大度に上陸し、半年過ごした場所が現在の翁長の高安家であった。翁長滞在中は、人々と交流し、六月ウマチーにはンマイー（馬場）で綱引きにも参加したという。高安家と中浜家は代々交流が続き、1994 年（平成 6）3 月に豊見城市と万次郎の出身地・高知県土佐清水市との間で姉妹都市盟約が締結された。



かつて「伊良波収容所」があった場所

伊良波収容所跡（いらはしゅうようじょあと）

伊良波収容所は主として一般住民が集められた収容所です。沖縄戦終盤、現在の伊良波小学校の西隣り、集落の共同井戸（カマガー）周辺にありました。この場所は、南部の激戦地でとらえられた人々が最初に送られてくる初期段階の収容所で、収容された人々はここで尋問や検査を受けたのち民間人と軍人とに分別され、さらに次の収容所へと移動させられました。民間人は主に宜野湾野嵩、中城安谷屋、石川などの収容所へ、軍人と識別された場合には金武の屋嘉収容所などへ移されました。このほか豊見城には、田頭、与根一帯にも同様の収容施設が点在していたようです。

市史案内　あなたに合った市史はどれかな？探してみよう！

豊見城市史（とみぐすくしし）ってなぁに？

『豊見城市史』は、私たちの祖先がこれまでに築き上げ、今なお、受け継がれている歴史や文化、生活、環境、教育などを記録したものです。おじいさんとおばあさんが生きた時代の生活、自分たちが通った学校の歴史、家の近くにあるあのシーサー・・など、みなさんは身近な人・モノ・風景にどんな歴史があるか知っていますか？　自分の身近な歴史に触れることができる、それが『豊見城市史』です。私たちは、市民のみなさまに親しまれる市史作りを目指し、日々変化する「豊見城」を記録しています。

豊見城市（豊見城村）全体のことを知りたい

ジョン万次郎を調べたい

琉球王国時代のことを調べたい

明治・大正時代のことを調べたい

祭りや拝所、戦前の暮らしを調べたい

自分のルーツを調べたい

沖縄戦のことを調べたい

村史復刻版

豊見城村が
初めて発刊した
豊見城の歴史本だよ！

現物が見たい

写真が見たい



歴史民俗資料展示室

文献資料編

ちょっと難しい
資料もあるけど
昔の豊見城を知る
貴重な文献資料が
たくさん載ってるよ！

とみぐすく写真帳

たくさんの方々から
提供していただいた
写真を大公開！
懐かしい写真から
つい最近の写真まで
載ってるよ。

民俗編

各字の拝所、祭り、
門中が調べられるよ！
市史の中でも1番人気！

新聞集成編

明治31年（1898）から
昭和20年（1945）までの
豊見城に関する
記事を集めたよ！
豊見城って、歴史が
奥深いんだよ〜！

戦争編

戦争編は、
各字での戦争状況や体験談を
読むことができるよ！
戦争の時、地域の人々は
どうしたんだろう？

移民編

移民編には、
移民名簿が載っているよ！
そこから自分の
親戚を探してみよう！
新しい発見があるかも！？

豊見城村史（復刻版）　1964年（昭和39）発刊　A5サイズ／全904頁

1964年（昭和39）に豊見城村で初めて発刊された村史の復刻版。自然状況から戦後の歩みまで、当時の村のことが事細かに掲載されています。当時の豊見城を知ることのできる資料！



豊見城村の中心地　村役所付近（現在の豊見城交差点一帯）



ルース台風被害（字与根）



豊見城村区長会（1963（昭和38）年12月16日）

第2巻　民俗編　2008年（昭和20）発刊　B5サイズ／全858頁

各字の概況や聖地、門中、人の一生など23字別に記録し、拝所の場所などを記載した地図も収録。どこを拝めばいいの？あの場所にはどういった由来があるの？自分の住んでいる地域を知ることができる1冊です。



字保栄茂の豊年祭〈上宜保〉（1939（昭和14）年撮影）



字名嘉地のシーサー拝み



97歳のカジマヤー（字与根）

第３巻　新聞集成編　　2010 年（平成 22）発刊　B5 サイズ／全 830 頁

1898 年（明治 31）～ 1945 年 (昭和 20）６月までの新聞から、豊見城村の動きが分かる記事を収録。時代ごとに解説を加え、関連コラムも掲載しています。豊見城村ってこんな地域だったんだ！と新たな発見があるかも？

【0042】豊見城間切の原勝負
（明31. 12. 9. 金. 琉新）
島尻郡豊見城間切には来る10日午前第９時秋季原勝負を執行し、其の余興として豊見城馬場に於て競馬の催しありと云。

明治31年の琉球新報の記事で、原勝負（ハルスーブ）と呼ばれる農作物の品評会が行われたと紹介しています。その余興として、豊見城グスクに隣接する字豊見城の馬場で競馬を行なったと記事は伝えています。字豊見城で競馬（琉球競馬＝美しさを競う競馬）が行われていたことがわかる貴重な記事です。

【1423】増産戦へ／少国民続々出動
（昭20. 1. 8. 月. 沖新）
島尻郡第二豊見城国民学校では６日から高等科男女生徒を動員して甘藷収穫作業に協力、掘り起しから整地、運搬まで豆百姓さんとして敢闘して居り村民を感激させている。

沖縄戦直前の昭和20年1月8日の沖縄新報（昭和15年に琉球新報、沖縄朝日新聞、沖縄日日新聞の三紙統合してできた新聞）の記事で、第二豊見城国民学校（現座安小学校）では生徒たちを動員してイモの収穫等の作業をしていると紹介しています。　兵隊にとられたりして男手が不足している中、子ども達が働き、農家を助けている内容ですが「敢闘」・「少国民」といった戦争に関連する言葉がちりばめられていて、当時の緊迫した雰囲気が垣間見れる記事です。

第４巻　移民編　　2016 年（平成 28）発刊　B5 サイズ・２分冊　（本論）624 頁、（証言・資料）761 頁

豊見城村から移民あるいは出稼ぎとして渡った人々が、渡航先でどのように生活していたのか。現地調査や関係資料から、トミグスクンチュのその後を追います。155 本の証言や、初公開の移民名簿など、盛りだくさんの内容です。



1918（大正7）年に沖縄で撮影された新垣徳一家（字根差部）



本土就職に向かう学生ら（1960（昭和35）年撮影）



ハワイ在住の豊見城出身者から字保栄茂に届いた救援物資

第６巻　戦争編　　2001 年（平成 13）発刊　B5 サイズ／全 1,075 頁

豊見城村民が当時体験した沖縄戦の様相を具体的に記録することに重点を置き、日米の軍事記録、行政文書、統計資料、更に体験者の証言等から見えてきた豊見城村での戦争について解説しています。



二豊校（現・座安小）で行われた秋季演練大会（1942（昭和17）年）



戦争で破壊された豊見城グスクの西原門（1945（昭和20）年撮影沖縄県公文書館所蔵）



記念撮影におさまる出征兵士とその父親（字嘉数）



一豊校（現・長嶺小）の本土学童疎開の学童たち。宮崎県岩戸村（現・高千穂町）。（1946（昭和21）年頃）

第９巻　文献資料編　1998 年（平成 10）発刊　B5 サイズ・２分冊／全 622 頁

琉球王国時代から明治、大正時代までの文書記録を収録し、時代・分野別に掲載。毛氏・豊見城家の家譜資料、組踊「未生之縁」の台本と現代語訳、地方役人の口上覚、ジョン万次郎関係資料など、昔の豊見城を知る上で必要な文献資料が満載です。文字資料のない先史時代やグスク時代についても考古資料から分析しています。



口上覚　地方役人の経歴書
【豊見城市指定文化財】



組踊「未生之縁」の筆写本を基に、241年ぶりに上演された組踊「未生之縁」（1996（平成8）年）



ジョン万次郎が滞在した字翁長の高安家

とみぐすく写真帳

村制施行 90 周年記念誌 1998 年（平成 10）発刊 A4 サイズ／全 222 頁

豊見城村制施行 90 周年記念事業の一環として、村民から提供された写真を中心に掲載。戦前の暮らしや風景、学校の移りかわり、各字ごとの写真、戦後のくらし・風俗など、豊見城村の移り変わりを見てみませんか？



戦前の家族写真（字豊見城）



乗合トラック（1954（昭和29）年頃撮影）



爬龍橋の開通（1995（平成7）年撮影）

販売価格

令和 4 年 10 月

①豊見城村史復刻版 2,000 円
②豊見城市史第 2 巻民俗編 3,000 円
③豊見城市史第 3 巻新聞集成編 3,000 円
④豊見城市史第 4 巻移民編 3,000 円
⑤豊見城村史第 6 巻戦争編 3,000 円
⑥豊見城村史第 9 巻文献資料編 3,000 円
⑦とみぐすく写真帳 2,000 円

新たな本を制作中です！豊見城市史では、
今後「社会と文化・教育編」令和8年度発刊予定、「通史編（仮称）」を発刊予定です。
引き続き、調査へのご理解・ご協力よろしくお願いします。

販売場所

①豊見城市教育委員会文化課・歴史民俗資料展示室（豊見城市字伊良波 392 番地）
②豊見城市教育委員会学校教育課（豊見城市宜保 1 丁目 1 － 1 豊見城市役所 4 階）
③道の駅てぃぐま館（豊見城市豊崎 1 番地 1162）販売時間年中無休（特別な場合除く）
9：00 ～ 18：00

豊見城市歴史民俗資料展示室

開館時間／火曜日～日曜日
午前9時～午後12時
午後1時～午後5時(入館は午後4時45分まで)

閉館日／毎週月曜日
祝祭日
年末年始(官公庁仕事納めの翌日～仕事始めの前日まで)
展示室の整理及び燻蒸作業等のため閉館とする日
※但し、特別な理由が生じた場合は、閉館日の変更もありますので、ご了承ください。

※展示室での飲食はご遠慮ください。
※展示室での撮影には許可が要ります。





住まい

市内で今は見ることのできない茅葺き屋根の民家を再現しました。



農具

田畑を耕す道具や収穫した穀物を脱穀する道具等を展示します。



漁具

周囲をサンゴ礁の海に囲まれた沖縄は海と共に育ってきました。合理性に富み、地理的、風土的諸条件に適合したサバニ等を中心に展示しています。



祭り・行事

12年に一度の高安の龕ゴウ祭や保栄茂、翁長の豊年祭等は地域住民を結集する上で大切な役割をしています。



歴史

市指定文化財の「口上覚（こうじょうおぼえ）」「字与根大城家文書」（レプリカ）や「重修真玉橋碑」が展示されており、市の歴史について学ぶことができます。



豊見城の沖縄戦

戦没者、疎開等に関する資料や市内から出土した不発弾の破片などを展示。戦争の恐ろしさ、悲惨さを体感し、恒久平和を考える。



戦後復興～本土復帰

戦後、物資のない時代に人々が工夫し、作り上げてきた生活道具等にふれることができます。



活動案内　資料収集・整理保存

展示資料や収蔵資料を充実させるため、調査研究を行い、資料を幅広く収集しています。収集した資料は詳細に記録を行い、大切に収蔵室に保管しています。また、資料の寄贈等に関するお問い合わせは下記までご連絡ください。

【豊見城市教育委員会文化課】　TEL.098-856-3671










沖縄戦によって焦土と化した沖縄には何も残っていない状況だったといわれ、豊見城市も多くのものを失いました。

しかし、人々は戦後復興に立ち上がり、飛行機のジュラルミンから鍋などの生活用品をつくる等、戦争で失ったものをひとつひとつ創り上げ、現在に至っております。現代の文化を形成した根源には先人の英知と偉業があり、それを知る手がかりが文化財であることは申すまでもありません。

わたしたちは常に文化財を通して古の生活を垣間見ることができ、それにより温故知新の思想を後世につなげていく義務があると考えます。

歴史民俗資料展示室は文化財の啓蒙と市民参加型といった活用面に重点を置き、ここを訪ねる全ての人々が先人の英知と偉業を体験し、学習し、そして創造する展示室にしたいと思います。また、先人達が育んできた歴史や自然、そして未来について考える空間としてお役に立てば幸いです。

豊見城市教育委員会文化課

豊見城市の文化財関係のホームページはこちら

市公式ホームページ〉観光・文化〉歴史・文化

豊見城市文化財マップ

豊見城市史編集の刊行物

埋蔵文化財の取扱いについて

とみぐすく
デジタルアーカイブ

文化財・戦跡を見学する際の注意点

①足下が悪かったり、ハブなどの危険生物がいる場合もあります。

②見学する際は周囲の環境に配慮しましょう。

③文化財の中には地域の聖地があります。
　文化財は国民共有の財産です。大切にしましょう。

豊見城市文化財ガイドブック

発行：令和 8 年 11 月
　　豊見城市教育委員会文化課 (中央図書館 1 階)
　　〒 901-0232　豊見城市字伊良波 392 番地
　　TEL:098-856-3671　FAX:098-856-1215

制作・印刷・製本：株式会社アント出版豊見城営業所
　　〒 901-0244　豊見城市宜保 2-7-18
　　TEL:098-850-3522　FAX:098-840-3722